

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41-2481(代)
発行人 西能 正一郎

五省会ニュース

五省会
一言に尽きるなかりしか
一筆に尽きるなかりしか
一努力に尽きるなかりしか
一不精に尽きるなかりしか

さようなら

ナナちゃん



古井さんに抱きかかえられてバスから降りる
ナナちゃん 西能病院玄関で

56豪雪にもがんばる

主人を守って八年三カ月、皆勤

西能病院の人気の、ナナちゃん(シエパード、メス、十歳)が、この十一月いっぱい隠退。同病院理事長、古井良洋さん(四二)に仕える盲導犬として八年三カ月、大雨の日も大雪の日も休まずに主人を守ってきた。だが、寄る年波には勝てない。人間では、もうお年寄りの部に入る。ナナちゃんフアンの職員有志は、お別れの日に、好物のヤキブタやハムを贈って、労をねぎらうことにしている。

ナナちゃんが、北陸盲導犬訓練所の第一号として古井さんのもとへやってきたのは昭和五十一年九月十二日。それから、自宅(富山市草島)と西能病院を往復して主人を誘導するのが主な仕事になった。乗物は富山港線や富山市電そして病院の通院バスも利用。車内にナナちゃんがある車内はナナちゃんがある。おとなしいので、病院の職員たちは「ナナちゃん、ナナちゃん」と、頭をなでてかわいがっている。おかげで、一日も休まず、一度も遅刻せずにやってこれました」と、しみじみ述懐する古井さんである。

ナナちゃん、ご苦労さんでした。ミルダちゃん、がんばれ！

私のホンネを

西能 正一郎

五省会ニュースも四年間も続き、今回の二十五号で五年目に入りました。出たばりに幾人かの方々のあたたかいお励ましやら、ご意見やら、記事の原稿までいただきまして、おかげさまで今日まで続いてきたものと、あつく御礼申し上げます。

病める人がさまよっている

ひしひしと感じる曲がり角の医療

第一号を出した時の友人の言葉で、「一回や、二回なら誰でも出せる。お前続ける自信あるのか?」。今でも原稿の締め切り日が近づき、この欄に書くものがなくて苦しんでいるときに、必ずこの友の言葉を思い出します。考えてみれば、こういう連載の文章は、自分の思っていることを素直に表出するしか方法がなく、自分の人生観を形を変えて表現しているにすぎないのです。

私のように人生経験のバラエティーの少ない人間には書けることの数はたかが知れております。人生観でも変わらない限り、すぐ種切れになるのはあたりまえの話です。「参った」と、いたくも

のこマーシャルを見せられていたような気持ちにさせはしないかと思つてのことです。ご存知かも知れませんが、県立中央病院の名譽院長、村田勇先生のご推挙によりまして、昨年春から日本病院会の常任理事を勤めさせていただいております。月に一、二回上京しまして、日本病院会を代表する方々のご意見を承わつておられますと、自分が井の中の蛙であるというのをいやというほど思い知らされます。また、それにも増して、日本の医療が大変な曲がり角にきていることをひしひしと感じます。

そして、自分の病院はどうなるのか、どうすればよいのかという切実な心配もなければありません。が、こうして大きく体制が変わろうとしているときでも、病める人が常に良い医療を求めていることは、忘れてはいけないと思つております。

医療を行う側は、勿論大きな変換を迫られておりますが、医療を受ける患者さんを始め、国民全体も、ジワジワと姿勢を変えさせられるであろうと思われまふ。この欄の記事も、今までのように、あたりさわりのないことばかりいっておれない時代になってきたように思います。五年目を迎えたことを契機に、医療のことについても少しも書きまされたように医療を受ける側がスムーズに姿勢が変えられるように、いくらか忠告めいたことも書きかも知れませんが、三十年間医師をやつてきまして感じた私のホンネを聞いてやっていただければ幸いです。

あすなろ

「私が金沢へきたのは、長男が医の道に励んでいるこの地に死にきたのでは、ない。献体するためにきた」といつたのは大阪で五十三年間も地域医療に捧げてきた山田学医師だ。山田氏はその年に亡くなり遺言通り献体された。この解剖のメスをとったのが長男の金大解剖学の山田致知教授だ。この話は昨年、新聞に報道されて深い感動を呼んだ。いうまでもなく医学学習のため解剖に自分の遺体を提供するものが献体である。一口にいってもなかなか実行に移せるものではない。元気のなさに死を考えたくなのが人情である。死んで自分がかわい。死体にメスを入れられるなんて考えてもぞつとすると、この世に凡人の気持だ。それに遺族にしてみれば到底承諾できぬのが肉親の情というもの。知人、友人とてそれをみんなが、許すほど理解はあるまい。献体はその垣根をふみ越える死生観、信念、使命感、あるいは未来への期待と信頼がなければできない。その垣根はたとえ医の道を進む人でさえ、なかなか越えられないのが実情なのだ。それを肌身に感じるからこそ解剖実習生は口をそろえて、「御遺体に直面した感動」を告白している(「解剖実習を終えて」 篤志解剖全国連合会刊)

▼先日、西能正一郎院長が「しらゆり会」に入会し献体の手続きをとったことを聞いた。そのことを口にするのと、「医にたずさわる者の当然のこと」の答えが返ってきただけだった。さりげないその一言に、使命感に生きたるべき見せつけられた。たじろぐ思いがした。

医療福祉制度の手ひき

健康保険法改正について

昭和五十九年十月一日から、「健康保険法の一部改正」が実施されました。

健康保険 本人も受診ごとに医療費の割相当額の一部負担金が必要になります。

「高額療養費」は被保険者本人にも適用されることになりました。又、一定の条件で世帯合算の制度も新設されました。

(A) 同一世帯について、同一月に、自己負担額が三万円(低所得者二万円)をこえる者が二人以上いる時は、その自己負担額を世帯で合算して五万円(低所得者三万円)までを限度額として、こえた額が払い戻されます。

(B) 一年間に同一世帯で四回以上高額療養費に該当した場合は、四回目からは三万円(低所得者二万円)をこえた額が払い戻されます。

(C) 血友病と人工透析を必要とする慢性腎不全の患者については、一月の限度額を一万円とします。

退職者医療制度が創設され、退職して国民健康保険に加入しても八割の給付が受けられることになりました。

尚、詳しいことは、医療ソーシャルワーカーにお尋ね下さい。

(医療ソーシャルワーカー 高村美和子)

【例】 世帯単位の負担額

同一世帯	同一月の自己負担額
A	5万
B	10万

(注) 同一世帯とは、一保険証当りのことをいう。

改正前
Aは高額療養費に該当しない
Bは 10万-5万1千=4万9千
4万9千円が払い戻される。

改正後
(A+B) -5万1千=9万9千
9万9千円が払い戻される。

【例】 世帯単位の負担額

5.1万円	3万円
11	12
1	2
3	4
5	6
7	8
9	10
11	12

が高額療養費として払い戻される

とけ合った「信頼」と「感謝」

富山医科薬科大学慰霊祭から

真摯なまなざしで献花、御霊に敬げんな祈りを捧げる学生たち。その誠実な姿にふれ、「涙がポロポロでまいました」と声をつまらせるしらゆり会員。〃献体の意義を確認、〃信頼〃と〃感謝〃が一つにとけ合った。それは、人間性に満ちあふれた、すがすがしい一日だった。

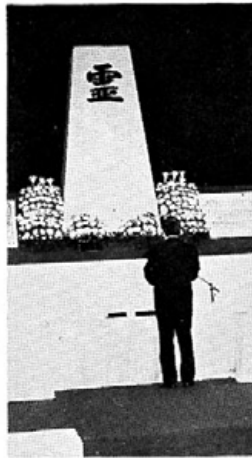
尊い遺志と遺族の善意

昭和五十九年度の富山医科薬科大学慰霊祭は十月二十日、同大学体育館で、遺族、しらゆり会員、大学教職員、学生ら約七百人が参加してとり行われた。この一年間の正常解剖物故者四十七柱（しらゆり会員）をはじめ病理及び法医学解剖物故

重みと責任を

このあと、医学部三年、麻生陽子さんと、同六年、愛場信康君が感謝の言葉を述べた。

追悼の辞を述べる 佐々学長



追悼の辞を述べる 中井理事長



合計三百一十一柱の諸霊の冥福を祈り、精進の決意を誓前に誓った。全員黙とう。佐々学長が「御献体は医学の進歩向上に寄与されました。次代の立派な医師を育てるという尊い遺志と、ご遺族のご熱意によるものです」、中井精一しら

ゆり会理事長が「医療と医学のため設立してくださいまして本当に有難うございました。これも、ご遺族のご理解と善意によるものと深くお礼申し上げます」と、それぞれ追悼の辞を述べた。

最後に学生を代表して二年生（女）が「十月九日から六か月にわたる解剖に入りました。本で読むのと、ナマの感じでは相当の違いがありました。そして、生命の尊さ、身体複雑さを痛感しました。解剖は、自分にとって、かけがえのない大切なものであり、おろそかにしてはならないという責任感が湧いてきました。もっと、もっと勉強して頑張ります」と力強く応えた。

存法などについて質疑応答。なかでも一会員（男）が「学生さんたちが真剣な表情でお花を供え、お参りしている姿を見て、涙がポロポロでまいました。この有難い慰霊祭に参加して、私もやがてこの学生さんたちの手で解剖していただくのだと、しみじみ思いました。学生さんたちが一生懸命勉強して、頼りがいのあるお医者さんに育つと思えば、本当に力強く思いました」と学生たちを励ました。

中井理事長らは「しらゆり会員は自分の意志で自主的に入会をされたものです。献体は人生最高の奉仕活動です」と述べた。

慰霊祭に引き続き、しらゆり会員と学生たちの懇談会が同大学食堂で、やく百五十人が参加してひらかれた。司会を松田健史教授、佐々学長と中井理事長が担当し、いさづのあと、この責任感が湧いてきました。もっと、もっと勉強して頑張ります」と力強く応えた。

ふれあい あい

このあと、医学部三年、麻生陽子さんと、同六年、愛場信康君が感謝の言葉を述べた。

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

ふれあい あい

激動下における明日の病院

高知市 第34回日本病院学会

五演題を発表

西能病院から九人が参加

「激動下における明日の病院」をテーマにした第三十四回日本病院学会（学会長・近藤慶二高知県立中央病院院長）は、十一月八日から十日までの三日間、高知市の県民文化ホールをメイン会場として開かれた。一般演題百九十題、特別講演、パネルシンポジウムなど、今日及び将来の医療の諸問題が発表、討議された。西能病院から九人が参加、五演題を発表した。



会場の県民文化ホール前での記念撮影

西能学長は第一日目の「激動下における明日の病院」と題する講演で、激動の時期にある。どれをとっても明るい面はほとんどみられない。このような試練の時にこそ、学会の場で十分な論議をつくして、明日への希望を開いていきたいものと思っている」と述べた。

▲（施設・設計・安全・環境）診療業務を継続しながら完了した病院全面

高齢の大腿骨頸部が歩行可能に

十年來の慢性関節リウマチ既往の女性（七六）が自宅で転倒、大腿骨頸部を骨折した治療経過を考察を加えて報告する。

近医で二カ月前、保存的治療を受けた後、当院へ転院入院した。人工骨頭置換術が適応と考えられたが、すでに高度の冠不全に陥っており手術困難、一生寝たきりと思われたが、四カ月にわたるベッド上で訓練を施行、受傷七カ月前で人工骨頭置換術ができた。術後三カ月の斜面台起立訓練、四、五カ月の平行棒内歩行訓練を行いT型杖で歩行可能となり退院。退院七カ月前の現在もT型杖で室内を歩行。

本症例を通じて、合併症を伴った高齢者の大腿骨頸部内側骨折の治療は整形外科医、内科医をはじめリハビリスタッフが協力し、最後まであきらめず、最後に治療を続け、右片麻痺・失語症となった。また終日眠りっぱなしで、話しかけても反応のない日が一カ月程続いた。その間、点滴静脈注射や、鼻腔栄養で生命を維持し、看護としては一般状態の観察や二時間毎の体位変換を行うと共に話しかけを続行。

同年九月ごろから話しかけに反応がみられるようになった。五十九年一月末から意志表示をするようになった。また栄養管を嫌やがって抜き、口